

敦賀で最期  
を遂げた

「水戸天狗党」

尊王攘夷の志を胸に  
京都へ向かう道中での悲劇

水戸天狗党は、動乱の幕末期に尊王攘夷を掲げて決起した水戸藩の改革派です。朝廷に志を訴えるため、京都に向かう道中、敦賀の地で悲劇的な最期を遂げました。そのエピソードは、NHK大河ドラマ「青天を衝け」の中でも描かれ、強烈な印象を残しました。幕末の水戸藩では、改革派と反改革派の対立が次第に激化。元治元（1864）年3月に結成された天狗党は、その後11月1日に家老の武田耕雲齋を首領として、朝廷に志を伝えるべく一

橋慶喜（水戸藩9代藩主 斉昭の子で後の15代将軍徳川慶喜）を頼って京都へ向かって西進を開始します。

しかし、皮肉なことに幕府による天狗党追討軍の総大将は、その一橋慶喜でした。当時の慶喜は京都御所を警護する役職にあり、立场上、天狗党を討たざるを得なかったのです。天狗党は敦賀の新保で12月17日やむなく降伏。初めは加賀藩によって3ヶ寺に預けられ、丁重な扱いを受けますが、幕府に引き渡された後は一転して罪人扱いに。主に鯖などを貯蔵する荷蔵に収監され、非人道的な扱いを受けます。その後、武田耕雲齋ら353名が斬罪となり、翌元治2年2月に松原の来迎寺野で処刑されました。

新たに敦賀市の  
有形文化財に指定

天狗党の浪士が幽閉されていた16棟の鯖蔵は北前船によって敦賀に運ばれた鯖肥料などの貯蔵庫として使われていたもので、現在の蓬萊町にありました。昭和29（1954）年、敦賀港修築に伴い取り壊す計画でしたが、保存を望む市民の声を受け、1棟が「水戸烈士記念館」として松原神社に移築されま



上／「水戸正士浜荷蔵へ入図」に描かれた当時の鯖蔵（天狗党騒動図より一敦賀市立博物館提供）。

下／「水戸烈士記念館（旧鯖蔵）」は現在、解体工事中。調査によって往時への復元を目指し、「史跡武田耕雲齋等墓」のある松島広場へ移築される予定。



松原神社は明治8（1875）年に武田耕雲齋ら411柱の烈士を祀るために創建。大正4（1915）年、現在地に社殿を移転し、建造物が竣工。毎年10月10日例大祭が行われています。

彰活動を今も継続的に行っているのは敦賀だけであり、悲運の先人に温かいまなざしを向ける敦賀人の情の厚さが伺えます。

また、天狗党関連の史跡を保存・有効活用するため、敦賀市は「史跡武田耕雲齋等墓保存整備委員会」を立ち上げ、松島広場の史跡公園化などの整備計画が進められています。同委員会の委員長で、敦賀市文化財保護審議会委員長も務める梶谷好晃さんは「文化財は国民共有の財産。史跡の本質的価値を明らかにすることが大事。北陸新幹線敦賀開業を前にして、見学者を受け入れるガイダンス施設などを先行させ、また中・長期的な視点も見据えて逐次整備を行っていききたい」と話します。地域社会に溶け込んだ今後の活動に期待が寄せられています。

史跡を保存、  
有効活用する活動も

敦賀では天狗党を慰霊し、悲運の歴史を後世に伝えようとする活動も行わ

●この記事に関するお問い合わせ

気比史学会（会長・梶谷氏）

TEL 090（1634）1226



敦賀には武田耕雲齋をはじめとする水戸烈士の墓が残されており、昭和9年に国の史跡に指定されています。